

初めて見る

東寺胎藏曼荼羅図の

仏たち

私市元宏

目次

一章 中台八葉院とその東西二院 三頁

二章 南北の金剛手院と蓮華部院 十一頁

三章 中央を囲む四つの院 二六頁

四章 東と西の外金剛部院 二九頁

五章 北と南の外金剛部院 三六頁

あとがき 五十頁

一章 中台八葉院とその東西二院

【中台八葉院】

ちゆうだいはちよういん

だいにちきよう

密教は、『大日経』による胎藏部と『金剛頂経』による金剛部から成り立つと言わ

れています。京都の東寺に伝わる胎藏と金剛の両界曼荼羅は、「伝真言曼荼羅」ある

いは「東寺西院本曼荼羅」とも称されています。これの原本は、空海が唐から持ち帰つ

た曼荼羅で、九世紀の半ば（八五〇年頃）に作成されたものです。「真言院曼荼羅」

は、原本を基にしつつも、原本とはやや異なるもので、彩色を用いて複製したと言われ

ています（一二世紀末から一三世紀末にかけて）。なお、以下の記述は、頼富本宏『東

寺の曼荼羅図』東寺宝物館発行（二〇一九年）にもありますが、東寺の売店で求めた

『国宝両界曼荼羅 胎藏界・金剛界』は、東寺西院本曼荼羅の胎藏と金剛の二枚入

りの曼荼羅図（『東寺の曼荼羅図』八頁と三〇頁を参照）で、これのプラスチック版

の裏面の仏たちの名称や、その他、インターネットからの解説なども参照しました。な

お、以下の記述で「左」「右」とあるのは、特に断りのない限り、図面の側から見た「左

右」、あるいは、仏の側から見た「左右」のことです。ただし、（東寺の）胎藏曼荼羅図の

方位は、これに向かつて見る場合、図面の上が東、下が西、左が北、右が南です（『岩波仏教辞典』巻末図八七八頁）。だから、「（図面に）向かつて」とある場合は、「左」は図面の「北」になり、「右」は図面の「南」になります。

胎蔵界曼荼羅図には、真ん中に正方形の区画があり、その中心に大日如来だい にち によらいが描かれています。大日如来は、歴史的な人間存在としての釈迦如来しや か によらい、あるいは、修業が結実して覺りさとを開いて覺者かくしやとなった阿弥陀如来あ み だ によらいから区別されていて、大日如来は、大宇宙の真理それ自体の姿を象徴する「法身ほつしん」です。胎蔵界曼荼羅図の大日如来は、真つ赤な蓮の花びらの中心にいて、その周囲に広がる八つの花びらの上に、八体の仏ほとけが居ます。この区画は「中台八葉院ちゆうだい はちよういん」と称されます。大日如来の上下左右の四体は如来で、斜めの四体は菩薩ぼさつです。八体の光背は同じ火炎光かえんこうです。

中央の大日如来は、「胎蔵たいざう」とあるとおり、膨ふくやかな母体の姿で、顔は円形、額にやや大きな円形の白毫びやくまうを付け、頭髮は風になびくような異常に大きい炎（風）髻けいで、半眼の目は鋭く見通す慈悲を湛たえ、首には「三道」と呼ばれる三つの筋が通り、両腕には「臂釧ひせん」と称される飾りを付け、胸には、上下に二つの瓔珞ようらくが、大きい宝石を真ん中に

して垂れ下がっています。両手の親指を腹部で合わせて人差し指を上に向けてこれに合わせる阿弥陀定印の印相で、両足をそれぞれの反対側の腿の上に載せる結跏趺坐の姿勢で瞑想しています。他の四如来も結跏趺坐で、四菩薩のほうは、右足だけを左の腿に載せる半跏趺坐です。九体は、いずれも、段ごとに蓮弁がややずれる魚鱗葺きの蓮華座に座っています。

大日如来の上には、宝幢如来が居て、右の胸を露にし、真つ赤な袈裟をその左手で支え、右手を「く」の字にあげて手のひらを上にかく施無畏印です（恐れを除いて安心させる印相）。この宝幢如来は、修行を妨げる魔力を追い払う結跏趺坐の姿勢を見せています。

大日如来の左には開敷華王如来が居て、首のあたりまで真つ赤な袈裟を着け、左手でその片隅を取り、右手は、掌を上に向けて開く施無畏印です。大日如来の右側には天鼓雷音如来が居て、その左手で袈裟を支え、右手の裏を斜め下に伸ばす降魔印で（これを「蝕地印」とも言います）、これは悪魔の誘惑を退ける印相です。この如来の姿は、覺りを開く姿勢で、天鼓が自然に鳴るように如来の法音（覺りを説くお言

葉）を發しています。

大日如来の下に居るのは無量寿如来で、首のあたりまで真つ赤な袈裟で身をまとい、両手の指を腹部で合わせ、人差し指を折り曲げる阿弥陀定印で、衆生が、その本性において花びらのように清浄であることを覺らせる智慧を發しています。

上下左右の四体の如来の間には、図面に向かつて右上から、時計の針巡りに、普賢菩薩、文殊菩薩、觀自在菩薩、弥勒菩薩が居ます。普賢菩薩は、王冠を頂き、胸に瓔珞の飾りを付けています。文殊菩薩は、優しい笑みを浮かべ、輝く黄金の髻のような宝冠を頂き、額に知恵の光明を發する白毫を付けていますが、宝剣も経巻も持っていません。觀自在菩薩も、同じような胸飾りを帯びて、結い上げた髻のような宝冠を頂き、やや厳しい目をこちらに向けています。弥勒菩薩は、釈迦の入滅以後、五十六億年を経て、この世に現れて救いをもたらすと言われています。

大日如来、宝幢如来、開敷華王如来、無量寿如来、天鼓雷音如来の五体を「五智如来」と称し、これら五体は、総じて、法界の本質的な性格と、大円鏡智（仏の法を映す心の鏡）と、平等性智と、妙觀察智と、成所作智（所作を成り立たせる智慧）とを

具現しています。なお、中央の大日如来は、その頭上に、五色の雲が波打つ宝冠を頂いていますが、これは五智如来の化身を表象する「五智宝冠」です。これらが、胎蔵界曼荼羅の中核を成す区画です。中台八葉院は、くつきりと方形の線で囲まれていて、その上下にあるのが、遍知院と持明院で、中台八葉院の南側（向かつて右）は金剛手院（金剛部院とも）で、中台八葉院の北側（向かつて左）は蓮華部院（観音院とも）です。中台八葉院のすぐ上と下には、それぞれ五体ずつ菩薩が並んでいます。上の五体が遍知院を構成し、下の五体が持明院を構成します。

【遍知院】

中台八葉院の真上には、如来と同じ魚鱗葺きの蓮華座の上に黒い三角形が描かれ、その背後に真つ赤な輪光があります。「遍く照らす智慧」の表象で「一切遍知印」と称されます。一切遍知印に向かつて右側（南）に居るのは大勇猛菩薩で、その右に大安楽不空真実菩薩がいます。

大勇猛菩薩は、その左手に三個の黒い如意宝珠を持ち、右手で利剣を握っています。利剣は、遍知が鋭く働く様子を、宝珠は願いを叶える遍知の働きを表します。この

菩薩ぼさつは、その名の通り、どこまでも「勇猛ゆうもうに」修行しゆぎやうの道を突き進む菩薩ぼさつです。

その南側だいあんらくの大安楽不空真実菩薩ふくうしんじつ ぼさつは、左右合わせて十二の手を持ち、右の六手は、五鈷杵ごこしよや、先端が三つ又の長い宝戟ほうげき（槍）や、先端が宝鈴ほうれいにも見える宝棒ほうぼうなどを持つています。左の六手は、蓮の花を載せた茎きや、高くあげた宝鐸ほうたよく（大きい鈴）や、後ろに利剣らしいものなどが見えます。この菩薩ぼさつは「普賢延命菩薩ふげんえんめい ぼさつ」とも称されて、賢く、幸せに、長生きするあらゆる願いを叶えてくれる菩薩ぼさつです。

遍知へんちに向かつて左（北側）に居るのは、仏眼ぶつげん仏母と、その隣りが准胝じゆんてい仏母です。仏眼ぶつげん仏母は、結跏趺坐けつかふざの姿勢でじつとこちらを見ている母の姿で、両手の指を少し組み合あわて腹部ふぶに置いていますが、これは、法界定印ほつかいじやういんの印相いんぞうです。

准胝じゆんてい仏母は、多数の手を持つていて、右手は、手の平を上に向ける施無畏印せむいいんと、人差し指と小指を立てる忿怒印ふんぬ（憤りを表す）の印相いんぞうで、五鈷杵ごこしよや利剣りけんや宝戟ほうげきや法珠ほうじゆなどを持つています。左手は、横向きの施無畏印せむいいんと、親指と人差し指と小指をあげる期克印きこくで、ほかに藥壺やうこや経籍きやうせき（教文）や宝珠ほうじゆなども見えます。この仏は、たくさんの仏たちを生み出す徳を具える仏母で、人の安産をも司つかさどります。中台八葉院ちゆうだいはちよういんの真上の

一切遍知印いっさいへんちいんとこれら四体しだいとが遍知院へんちいんを構成しています。

【持明院じみょういん】

中台八葉院ちゅうだいはちよういんの真下まげに居る五体の仏ぶつが「持明院じみょういん」を構成します。五体の中央には、般若菩薩ぼんざつが居ます。覺さどりを開く智慧ぼんざつの菩薩ぼんざつで、一面六臂いっめんろくび（手）で、その智慧いんぞうを印相いんぞうで表しています。右手は、親指と人差し指で輪をつくる説法印せつぽういんを結び、相手を説き伏せる折伏しやくふくを表しています。ほかの手は、忿怒ふんぬらしい印と、手の平を下に向けることで、修行しゆぎやうの妨げを取り除く蝕地印しよくちいんです。左手は、腹部のあたりに横向きの施無畏印せむいいんですが、そのほかの手は薄れてよく見えません。

般若菩薩ぼんざつに向かつて右には、降三世明王ごうさんぜみようおうと、その向かつて右に不動明王ふどうみようおうが居ます。髪かみの毛を逆立て、眼光鋭く目を開き、やや黒ずんだ二体の明王みようおうたちは、忿怒ふんぬの形相ぎやうそうをしています。ここの降三世明王ごうさんぜみようおうは三面八臂さんめんぱちです。降三世明王ごうさんぜみようおうの印相いんぞうは独特です。胸の前で左右の小指をからませ、人さし指を立てて残りの指をにぎります。これを、降三世印ごうさんぜいんと言います。この印相いんぞうは、「三毒」（貪欲と怒りと覺さどりの真理への無知）を滅めつぼす印相いんぞうです（インターネットのウィキペディアによる）。左の手には、長い三つ又の宝戟ほうげき

と宝弓・宝箭と、輪のような宝索？を持っています。右の手には、五鈇杵の鈴と宝珠を載せた宝棒と利剣を持っています。これに向かつて右（南）の不動明王は、大きな目を開いて睨み、左手に羂索、右手に利剣を持っています。

般若菩薩に向かつて左（北側）には、大威徳明王と勝三世明王が居ます。大威徳明王は三面六臂（六手）で、左右の人差し指を胸のところで合わせる檀陀印です。左の手では、三つ股の刃先の長い宝戟と法輪を持ち、右の手では、利剣と五鈇杵の宝棒を持っています。その北隣の勝三世明王は、一面二手です。右手に大きな三つ又の長い宝戟を握り、左手で忿怒の印相をつくっています。

中央の般若菩薩は、智慧で身を守ることを教えますが、明王たちは、力でねじ伏せるように教えて祈伏したり、温厚な仕方で摂受させる働きをします。般若菩薩に属するこれら左右の四体の明王たちの背光は燃え上がる火炎光です。

二章 南北の金剛手院と蓮華部院

【金剛手院】

中台八葉院が胎藏曼荼羅図の中心になるとすれば、その上下の遍知院と持明院は、中台八葉院の左右に広がる金剛部院（金剛手院）と蓮華部院（観音院）とつながつて、大日如来が発する靈威がさらに拡大する有り様を伝えています。

中台八葉院の区画の左右には、向かつて左側（北）に、三体ずつ並ぶ七段になつて、二十一体の観音菩薩が描かれています（蓮華部院、または観音院）。向かつて右側（南）には、同じ構成で、金剛薩埵など二十一体の金剛系の仏が描かれています（金剛手院、または金剛部院）。金剛手院は、間に小さく描かれた十二尊を含めると三十二尊になります。以下の諸仏の名称などは、東寺の曼荼羅図（MANDALA）の裏面に記されている名称によります。

内側から第一列目

以下の二十一体の主な諸尊は、東寺発行の曼荼羅図により、解説にはインターネット

の「胎蔵曼荼羅金剛部院」を参照しています。なお、東寺の「曼荼羅図」では、独鈷杵、三鈷杵、五鈷杵など法具や、諸仏の印相の判別が難しい場合がありますので、ご承知ください。

一 発生金剛部菩薩。いわゆる「ボーディサットヴァ」の名称で知られ、金剛部に属する諸仏を生み出す母性の菩薩です。両手を開いて合わせ、その上に、細い八角形の棒で、独鈷杵に似た金剛槩という短い宝棒を立てています。

二 金剛鉤女菩薩。三つ又の槍のような金剛鉤を左手に持ち、右手は開いてやや下に向ける与願印（衆生の願いを受け止める）です。この女性の菩薩は、その鉤で衆生を引き寄せ、印相をもつて、衆生を金剛部が示す智慧へ導く働きをします。

三 金剛手持金剛菩薩。原名は『大日経』にある名前の「マーマキー」から来ていると思われる。『マーマキー』は「多くの（衆生の）母」という意味です。左手に金剛杵を持ち、右手は開いてやや下に向ける与願印です。

四 金剛薩埵菩薩は、大日如来から密教を授けられた菩薩ですから、密教の中心的な菩薩です。金剛部院が「薩埵院」と称されるほど、この院全体の中心です。右手に智慧

の象徴である三鈷杵さんこしよを持ち、左手は、親指と小指を立てて、他の指をやや曲げてあげる施無畏せむい与願印よがんいんのように見えます。この印相いんぞうは、衆生の願いを受け止めることで安心を与える印相いんぞうです。

五持金剛鋒菩薩じこんごうほうぼさつは、金剛薩埵こんごうさつたの真下に居ます。持金剛鋒菩薩じこんごうほうぼさつは、鋭く長い「金剛鋒」を右手に握にぎつていて、この鋭い槍やりは、仏の大きいなる智慧の表象で、衆生の煩惱ぼんのうを貫き破る働きをします。

六金剛拳菩薩こんごうけんぼさつは、両手を少し前に出して、堅固な金剛拳こんごうけんを握り、この印相いんぞうで、衆生の貪瞋痴とんじんちの「三毒」(貪欲と憎悪の怒りと真理への無知)を破る菩薩ぼさつです。

七忿怒月鬘菩薩ふんぬがつてんぼさつ。如来の慈悲を伝える金剛部院の仏たちの中で、一体だけ片隅で、一面四臂び(手が四本)で、青黒い姿の忿怒ふんぬの形相かたちせうを見せています。実は、この姿もまた、「慈悲の表れ」だとあります。その証拠に、白淨菩提心はくじようぼだいしん(月)の鬘ぼうを額に持つ菩薩ぼさつで、これは煩惱ぼんのうを断つ菩薩ぼさつです。右手に槍のような三つ又さんごうの金剛鉤こんごうかぎを持ち、持明院の右から二番目の降三世明王ごうさんぜみようおうの憤怒姿ふんぬと同型の菩薩ぼさつだと言われます。持明院の降三世明王じみょういんごうさんぜみようおうも、同じ三つ又鉤かぎの宝戟ほうげきを持っています。

内側から第二列目

以下の諸仏は、インターネット、例えばさくらインターネット bukhou.com などをも参照しています。

一 虚空無垢持金剛菩薩。左手に独鈷杵を持ち、右手は手のひらを開いて上に向ける施無異印の印相です。その女性的な顔と姿は、衆生が本来持つている菩提心の徳を表しているようですが、これは、虚空（大空）が何の障りもないように、一切の執着や戯れの論を離れ、無垢にして無染、妄りがましく分別しない心を表す仏です。

二 金剛牢持菩薩は、独特の上目で、左手に、上の菩薩と同じに独鈷杵を持っています。が、右手は蝕地印です。

三 忿怒持金剛菩薩。左手に金剛杵を持つ菩薩です。右手とその姿勢は虚空無垢持金剛菩薩と同じです。眼光は鋭く、やや横を向いています。

四 虚空無辺超越菩薩。左手に金剛杵を持ち、右手の印相と姿勢は、上の忿怒持金剛菩薩と同じですが、上とは異なり、優しい母性の顔です。

五金剛鎖菩薩は、右手を胸の辺りにあげ、鎖を持っています、衆生が悪い道へ逸れないよ

う鎖でつなぎ止める菩薩ぼさつです。右手は拳を上に向けた金剛拳こんごうけんです。

六金剛持菩薩こんごうじ ぼさつ。左手に独鈷杵とっこしよを持っています。左手は何かの宝棒ほうぼう（？）をつまむように持っています。

七持金剛利菩薩じ こんごうり ぼさつ。左手に五鈷杵ごこしよを持ち、右手は、親指と人差し指で輪を作り小指を立てる独特の印相いんそう（説法印せつぼういん？）で、正面を向いています。

内側から第三列目

一金剛輪持菩薩こんごうりん じ ぼさつ。金剛薩埵こんごうさつたと同じほど尊い仏ほとけですが、ここでは、右手の指先に、名前を表す円形の法輪ほうりんの代わりに宝鐸ほうちやく（大きい鈴）を載せています。

二金剛説菩薩こんごうせつ ぼさつ。「説」は「名声」を意味しますから、人々に名声をもつて、如来にょらいの智慧を説いて衆生しゆじやうを導く菩薩ぼさつです。左手は膝の上で金剛拳こんごうけんを結び、右手は人差し指と中指を立てて、説法を行う印相いんそうです。

三憚悦持金剛菩薩ちやくえつ じ こんごう ぼさつ。「悦」は性行為を意味しますから、男女の性行為を清らかにする菩薩ぼさつです。左手は膝の上で、親指を中にして握る蓮華拳れんげけんで、右手は開いて胸にあて、その上に（煩惱ぼんのうを真つ直ぐにさせる）独鈷杵とっこしよを立てています。

四金剛牙菩薩こんごうげ ぼさつ。名前は「堅固な牙をもつ者」の意味です。堅固な牙で魔力を挫くことで、衆生しゅじょうをも救う菩薩ぼさつですから、ほんらい勇猛ゆうもうな菩薩ぼさつですが、ここでは、正面を見据えるふつくらした顔で、左手の上には、長い宝棒の上に五鈷杵ごしよが見えます。右手は、胸のあたりで、親指を立て他の指を広げる蓮華拳れんげけん(?)とも思える印相いんぞうを見せています。この像は、通常いんぞうの金剛牙菩薩こんごうげ ぼさつとは印相も持ち物もかなり異なるようです。

五離戲論菩薩りけろん ぼさつ。顔をやや右に(向かつて左に)傾け、優しい両眼はじつとこちらを向いています。独鈷杵どっくしよを立て、左手でその上部を握り、右手の人差し指を立てる印で、妄想や戯れ言ざれごんの議論を離れて、智慧の真理を覚さとらせる菩薩ぼさつです。

六持妙金剛菩薩じみょうこんごう ぼさつ。この名称は「最上の金剛杵をもつ者」を意味します。仏の智慧ほとけの微細な所まで通じる功德くどくを働かせる菩薩ぼさつです。右手で、独鈷杵どっくしよを両側にもつ金剛杵を立て、左手は金剛杵こんごうしよを握っています。

七大輪金剛菩薩たいりんこんごう ぼさつ。優しい笑顔の菩薩ぼさつです。名称は「大輪宝をもつ者」を意味します。大輪宝たいりんほうは、仏の智慧を転輪ぼとけさせることで、もろもろの魔力を砕く働きをします。金剛輪持菩薩こんごうしよや大輪明王たいりんみょうおうなどと同体だと言われています。左手で金剛杵こんごうしよを握り、右手は

肘を上にあぐらして小指を立てる印相のようです。

【蓮華部院】

蓮華部院（観音院）は、金剛手院（金剛部院）と同様の二十一尊と、小さい十三尊を含めると三十四尊です。以下の記事も、『東寺の曼荼羅図』や『岩波仏教辞典』や、インターネットからの情報などに基づいています。ところで、「観音」とは、ほんらい、語られた「言葉（音）を観る」こと、すなわち、言葉を「見える姿で」表すことを指していると思われれます。

内側から第一列目

一蓮華部院（蓮華部）の諸尊を出生させる菩薩です。左手は親指を中に入れて握る蓮華拳を伏せて膝の上に置き、右手は、親指と人差し指と小指を立てる期克印（説法する）のように見えます。

二大勢至菩薩は、別名「観自在菩薩」です。「聖観音菩薩」が抱く大いなる勢いの大慈悲によつて衆生に菩提心を植え付けます。左手に大きな蓮の花の茎を持ち、右手は、親指だけをあげる？ 独特の印相に見えます。

三毘哩俱胝菩薩。梵語の名前は「眉の間にシワがある菩薩」の意味です。シワは大きな慈悲の表れを指しますが、この仏の額には、覺りの光を発する白毫（ほくろ）があるだけで、顔は次の観音菩薩とそっくりです。四臂ですから、手が四本あり、右手では、数珠を輪にして（宝珠輪？）持ち、左手は、茎の長い蓮華の花を持っています。

四聖觀自在菩薩。別称は「觀世音菩薩」ですが、一般に「觀音さま」と呼ばれています。觀音院の主尊で、衆生を救済する慈悲を表す菩薩です。膨やかな顔の優しい瞳（ひとみ）の觀音は、その左手に大きい蓮華のつばみを持ち、右手で、そのつばみに触れています。このつばみは、まだ開いていない衆生の本性に宿る清浄な真理を表していて、聖觀音は、衆生の心に蓮を開かせる仕草をしています。

五多羅菩薩。梵語の「ターラー」は「瞳孔」を指します。この菩薩は、聖觀自在菩薩の眼から生まれたと言われて、大悲の眼で衆生を救う母神とされています。東寺の曼荼羅では、やや黒ずんでいます。

六大明白身菩薩。梵語の名前の意味は「ガウリーのように白く輝く大いなる智慧（をもち者）」です。ガウリーは、ヒンズー教のいわゆるシヴァ神の妻の名前です。この菩薩は

美しい女性の顔で、右手は、開いて下げる蝕地印（しよくちいん 与願印）で、左手は、花卉の上に小さな仏を載せた宝棒（ぼとけ）を持っているようです。

七馬頭観音菩薩。梵語の名前の意味は「馬のたてがみ（をもつ者）」「馬の首（をもつ者）」で、もとは、ヒンズー教のヴィシュヌ神でした。上の仏たちとは異なり、三面の顔は憤怒の相で「馬頭明王」とも呼ばれます。開いた左右の手の裏を合わせて合掌（がっしやう）しているようですが、これは「降伏（かうふく）」を表すのでしょうか。「ごうぶく」とは、自分の煩惱（ぼんのう）や悪心を打ち負かすこと、あるいは修行（しゆぎやう）を妨げる悪鬼や邪神を降参（かうさん）させることです。（馬に乗って）駆けまわり、様々な悪霊（こふく）を降伏（かうふく）させて、衆生（しゆじやう）を迷妄（めいもう）から救い出す菩薩（ぼさつ）です。

内側から第二列目

一大随求菩薩。梵語名は「大いなる従僕」「大いなる随求（の者）」です。「随求（ずいぐ）」は、相手の求めに応じることですから、衆生（しゆじやう）の様々な求めに自在（じざい）に応じる菩薩（ぼさつ）です。この菩薩は、ほんらい四面八臂（び）だとありますが、東寺の曼荼羅図では一面八臂（び）です。正面を向いた慈悲の相で、頭には宝冠（ほうかん）、右手に五鈷杵（ごこしよ）と利剣（えつが）と鉞斧（えつが）（幅の広い斧）と三股の宝戟（ほうげき）を持ち、左手には赤い円形の法輪（ほうりん）を載せた宝幢（ほうどう）（矛（ほこ）のこと）の長い柄（え）を手で支え、

一つの手でお経の本である梵篋ぼんきやうを持ち、もう一つの手で赤い炎に縁取られた花（蓮華）を指す）を持っています。

二堵波そとば大吉祥菩薩は、左手で蓮の花の茎をもち、右手では花卉で囲まれた円形のものを持っています。「堵波そとば」とは、ほんらいドーム型の塔のことですが、僧の用具を入れる丸い容器をも指します。「吉祥きちじやう」は「めでたい前兆」を意味します。したがって、「塔ほつ」（法界かいどう婆ば 大日だいにち如来によらいの象徴）に具わる大いなる吉祥きちじやうをもたらし菩薩ぼさつのことです。大日如来だいにちによらいの法界ほつに住んで、蓮華（世の汚れに染まらない清浄無垢せいじやうむく）に包まれ、衆生しゆじやうに利益をもたらしめでたい大吉祥菩薩だいきちじやうぼさつです。

三耶輸陀羅菩薩やしゆだらぼさつ。梵語の原名「ヤシヨーダラー」は、王子であつた釈尊が出家する前の妃きの名前ですから、この妃を仏とし、衆生しゆじやうの菩提心ぼだいしんにさまざまな功德くどくを生じさせる菩薩ぼさつです。ふつくらとした女性の顔で、右手は、開いてやや下に向ける与願印よがんいんで、左手は上に向ける与願印よがんいんです。

四如意輪菩薩しよいにりんぼさつ。「如意輪觀音にょいりんかんのん」の名称で広く親しまれています。「法輪ほうれん」を意のままにめぐらせて衆生しゆじやうに説法し、左右六本の手で、六道の苦しゆじやう（衆生の苦しみ）を除いてくれる

菩薩ぼさつです。胸の中央に、右手で、意のままに物事を生じさせる黒い如意宝珠にょいほうじゆを輝かせています。左手に掲げるのは花びらをつけた法輪ほうりんで、その功德くどくで一切衆生の願いを叶えることを示しています。なお、右手の指を頬にあてるのは思惟印しゆいんで、何事も想いのままに行うことを表すのでしよう。

五大吉祥大明菩薩だいさちじやうだいみやうぼさつ。梵語名は、「大いなる吉祥さちじやうの大きいなる明智ぼんぎ（をもつ者）」です。右手は、指をやや曲げて立てる与願印よがんいんで、左手は拳けんを下に向けて膝に置く蓮華拳れんげけんです。六大吉祥明菩薩だいきちじやうみやうぼさつ。上の菩薩名から「大」が抜けている同名の菩薩ぼさつです。左手の蓮華拳れんげけんを上にあげています。「衆生の迷妄しゆじやうを断つ」菩薩ぼさつとして、上の菩薩ぼさつとともに、「七白吉祥しちびやく」の一人に数えられます。

七寂留明菩薩じやくるみやうぼさつ。静寂の境地に住み、智慧で衆生の迷妄しゆじやうを断つ菩薩ぼさつです。白い紐状の天衣を首の後ろから両肩にかけて翻ひるがえし、瞳ひとみを開いた優しい女性のその顔はやや左を向いていて、左手の人差し指を立て、右手の掌たなひてを高くあげています。心静かな（寂）瞑想にあつて、心の迷いから離れることで、明智に達する仕草です。經典には忿怒ふんぬの形相とありますが、ここでは柔和な表情です。

内側から第三列目

一被葉衣觀音。ひよういかんのん梵語名の意味は「（パルナ樹の）葉をつけるシャバラ族（の女）」です。パルナの葉は、身を汚れから護るとされ、この女尊は、夫と家族や、その地域と統治者を煩惱ぼんのうから護る菩薩ぼさつです。右手は、二股で先端に宝珠ほうじゆを載せた宝戟ほうげきを持ち、左手は輪になつた羂索けんじやくを持っています。

二白身觀世音菩薩。びやくしんかんぜおんぼさつ「白衣觀音びやくえいかんのん」とも称され、通常は白衣をまといていますが、ここでは、上の被葉衣觀音と似た顔の表情で、同じように赤い衣を身につけています。右手は、上部が半円の刃の宝棒ほうぼうを持ち、左手は、こちらへ向けて開いた施無畏印せむいいんです。如来にょらいの大悲を身に体して、衆生しゆじやうを救済する妃菩薩ひぼさつです。

三豐財菩薩。ぶたさいぼさつ梵語名の意味は、「福德（財宝）を得た者（女尊）」です。一面四臂び（手）で、右は、宝珠ほうじゆを持つ手と、開いた手を右に向ける与願印よがんいんで、左は、大きな蓮華れんげの花が二つ見えます。衆生しゆじやうに財宝の福德を与える妃菩薩ひぼさつです。

四不空羂索菩薩。ふくうけんじやくぼさつ「不空羂索觀音ふくうけんじやくかんのん」とも称されます。三面四臂び（手）で、左手の一つは、輪になつた羂索けんじやくを持ち、漁の網で、煩惱ぼんのうと生死の世界に網を張つて、漏らすことな

く済度さいどする大悲願を表します。不空ふくう羅索けんじやく觀音かんのんは、通常、両手で合掌がっしやうする印相いんざうが多いようですが、この曼荼羅圖ふくくうけんじやくかんのんの不空羅索觀音は、両手で、親指と人差し指の先端を合わせて輪を作り、両方の小指と薬指を伸ばし、中指を軽く曲げる独特の轉法輪印で、この印は説法を意味します。また、右手では、降魔ごうまい印もつくっています。

五水吉祥菩薩すいきちじやうぼさつ。梵語名は「水の吉祥な女尊」を意味します。ほんらい、大日如来だいにちによらいの慈悲の水瓶をもつて衆生しゆじやうの菩提心ぼだいしんを潤うるす菩薩ぼさつですが、ここでは、右手は開いて下に向け、誘惑の惡魔を退散させる蝕地印しよくちいんで、左手で、蓮華の花弁の茎を持っています。七吉祥の一人です。

六大吉祥變菩薩だいきちじやうへんぼさつ。梵語名は「吉祥の大智を持つ女尊」の意味で、さまざまな姿へんに変化けして衆生しゆじやうを救済する菩薩ぼさつです。顔をやや右に傾け、右手は開いて横にする施無畏印で、左手は大きな花卉の蓮華の茎を持っています。

七白処尊菩薩びやくしよせんぼさつ。梵語名の意味は「白衣をまとった者（女尊）」です。もろもろの仏たちに大悲を生じさせることで、衆生しゆじやう（生きとし生けるものすべて）に清い菩提心ぼだいしんを生み出す蓮華部の母なる菩薩ぼさつです。右手は、手の平を見せて、下に向いた与願印よがんいんで、左手は、

大きな蓮の花を載せた茎を持っています。胎蔵曼荼羅図は、暖かい母性を発するものがあり、菩薩が母薩に見えてきます。

以上、真ん中の中台八葉院を核にして、その上下に遍知院と持明院、その左右に金剛手院と観音院、これら五つの部（院）で構成される正方形が、胎蔵曼荼羅の主要区画です。この方形の上（東側）には、釈迦院があり、下（西側）には虚空蔵院があります。

【釈迦院】

釈迦院は、釈迦如来を中心に、向かつて右側（南）に、上に九体、下に八体の仏像が、上下二列に並び、向かつて左側（北）にも、上に九体、下に八体の仏像が、二列に並んでいます。真ん中に怪魚を載せた緑の柱が二本立っていて、これらに挟まれて、中央に釈迦牟尼と、釈迦牟尼に向かつて右に観自在菩薩、向かつて左に虚空蔵菩薩が居ます。これら三体は、仏（釈迦）と法（観自在）と僧（虚空蔵）の三宝を表します。三体の像は、やや黒ずんではつきり見えませんが、凡夫への理解のために変化身で描かれています。この三体の左右の二列の中には、大目犍連、舍利弗、須菩提などが向かつて左に居て、優波離などが向かつて右にいます。これらは釈迦の十大弟子たちです。

釈迦院しやかの右側（南）の上の列の最右端から四番目に、釈尊の十大弟子の一人で説法に優れ、笑みを浮かべた迦旃延かせんねんが居ます。迦旃延は、右手の人差し指と中指を立て、左手の指は横に向けています。迦旃延の左側（北）に居るのは、最後まで釈迦しやかに付き添った容姿端麗ようしたんれいで美青年の阿難あなんです。釈迦しやかの經典を結集したこの弟子は、両手がっで合掌しやう（左の自己と右の仏が一体になる印相）しています。

釈迦院しやかの右側（南）の下の方で、最右端に居るのは、歡喜の笑みを湛える如来笑菩薩にょらいしやうぼさつで、左手に蓮華を載せた茎を持っています。その左側（北）には、如来にょらいの法を語る如来語菩薩にょらいごぼさつが居て、左手の上には、蓮華の上に炎光を放つ青い宝珠ほうじゆを載せています。〔『東寺の曼荼羅図』四二頁〕。

【虚空蔵院】

この院では、真ん中に、虚空蔵菩薩こくうぞうぼさつが、結跏趺坐けつかふざの姿勢で描かれています。これに向かつて右には、上下に五体ずつ仏像が並び、最右翼には、金剛蔵王菩薩こんごうざおうぼさつが、多面多臂ひで、様々な法具を左右に持つて大きく描かれています。

虚空蔵菩薩こくうぞうぼさつに向かつて左（北）には、上に五体、下に四体の仏ほとけが居て、その最左端に

は、千手千眼観自在菩薩せんじゆせんげんかんじざいぼさつ（千手観音菩薩ともある）が居ます。その三面と、その上に描かれた法輪の中に二四もの顔を持つて合掌がつしやうし、さらに両手で説法印せつぽういんをつくつています。さらに、左右の多くの手で、様々な法具を持っています。衆生しゆじやうをもれなく救済する菩薩ぼさつ像です（『東寺の曼荼羅図』四三頁）。

三章 中央を囲む四つの院

釈迦院しやかいんと虚空藏院こくうざうとを含む方形の全体をやや薄い緑でくつきりと縁取るのが、方形の上下左右にある文殊院もんじゆいんと蘇悉地院そしつじいんと地藏院じざういんと除蓋障院じよがいしやういんです。

【文殊院】

この院の中央には、二柱ふたはしらの緑の門柱が描かれています。門の中は、中央に文殊師利菩薩ぼさつが居ます。顔は「童子形どうじ」だとありますが、丸顔にやや笑みを浮かべた女性に見えます。この菩薩ぼさつの頭の上には、「五髻ごけい」と称される五つの「まげ」が結ゆわれています。如来にょらいの五智を表すので、この文殊もんじゆは「五髻文殊ごけいもんじゆ」とも称されます。五髻文殊ごけいもんじゆは、左手に蓮華の花を持ち、蓮華の上には壊れることがない智慧を表象する五鈷杵ごこしよが載っています。右

の手の平の上に薄く見えるのは宝棒ほうぼうでしょうか。

この菩薩ぼさつの前には、火炎光を帯び、黒い宝珠ほうじゆのある舍利塔しゃりとうらしいものが置かれています。この菩薩ぼさつの後ろ（上の方）には、向かつて左に觀自在菩薩くわんじざいぼさつと、右に普賢菩薩ふげんぼさつが居ます。菩薩ぼさつの前（下の方）には、二人の門番が居ます（『東寺の曼荼羅圖』四六、四七頁と五〇頁を参照）。

門の左側（北）には、光網こうもう、宝冠ほうかん、無垢光むくこう、月光がっこう、妙音みょうおん、瞳母嚕どうもろの六体の菩薩ぼさつたちが並び、六体目の瞳母嚕菩薩どうもろぼさつは、左右に、上下二体ずつ、肥者那ひしゃな、者那しゃな、阿耳多あじた、阿波羅耳多あわらじたの四体の小さな使者衆に囲まれています。「使者」とは、仏ほとけや菩薩ぼんぜいの本誓ほんぜいを伝えるために、救命や慈悲の働きをする者のことです。最左端にあるのは、大きな薬壺けつでしよう。その上部は、赤い花卉けいの上に五鈷杵ごこしよが載っています。

門の右側（南）も、左側と全く同じ構成で、髻けい設尼せつに、郎波髻ろうはけい設尼せつに、質怛羅しつだつら、地慧ちけい、鉤召使者こうしやうししやと、赤い宝玉けんぞくを先端に付けた宝棒ほうぼうを持つ鉤召使者こうしやうししやの一人の眷属けんぞくの六体と、この一体の眷属けんぞくを囲む小柄な四体の使者たちが並んでいます（『東寺の曼荼羅圖』五〇頁を参照）。最右端には同じ薬壺やっこらしい大きな壺けつが見えます。

【蘇悉地院】

「蘇悉地」は「妙成就」を意味し、言葉に尽くせぬほど見事に完成していることを指します。唐では、『大日経』の胎藏部と『金剛頂経』の金剛部のほかに、第三部として『蘇悉地経』による蘇悉地部がありました。中央には、齒をむき出し、両眼を開いて睨む青い大きな明王が居て、左右の手で燃える宝珠を掲げています。その左側（北方）には、不空供養宝菩薩と孔雀王母菩薩と一髻羅刹女と十一面觀自在菩薩の四体が居て、右（南方）には不空金剛菩薩と金剛軍荼利と金剛將と金剛明王（優しい顔の菩薩姿）が居ます。この院の両端には、文殊院と同じ薬壺らしい大きな壺が置かれています。

【地藏院】

左側（北方向）の地藏院は、上（東方）から、除一切憂冥菩薩、不空見菩薩、宝印手菩薩、宝光菩薩、地藏菩薩、宝手菩薩、持地菩薩、堅固深心菩薩、除蓋障菩薩の九体です。修行を含むあらゆる苦難に耐えて、一切衆生を憐れみ、福德を授与する菩薩たちです（『東寺の曼荼羅図』四七頁）。

【除蓋障院】

右側（南方向）の除蓋障院は、上（東方）から、救護恵菩薩、破惡趣菩薩、施無畏菩薩、賢護菩薩、不思議慧菩薩、悲愍恵菩薩、慈発生菩薩、折諸熱惱菩薩、日光菩薩の九尊が居て、名前の通り、「苦しみを除く」菩薩たちで、衆生の能力に応じて、覺りの妨げになる煩惱を取り除く徳（働き）を授与します。

四章 東と西の外金剛部院

胎藏曼荼羅図の最も外側を構成するのが、上下左右の最外院で、「外金剛部院」と称されています。上（東）には大小合わせて三十尊以上、左右（北と南）と下（西）には、併せて百尊近い仏たちが居ます。

【外金剛部院】（東）

東の外金剛部院の真ん中には、下部の文殊院の中央を占める二つの門柱と同じような門柱が来ています。二柱の門の上には、それぞれ怪魚らしいものがいて、二匹が吐き出す黄色の（黄金の？）帯の上に居るのは二体の守門天で、二体の守門天の両側に

は、二体の妃たち守門天女しゅもんてんによが居ます。門の外側の左（北）には帝釈天たいしゃくてんが居て、門の右側（南）には持国天じこくてんがいます。（以下の記述は「インターネットの Mandara Dualism」〔二〇二四年一月一二日〕の「外金剛部院（東）」と、東寺発行のプラスチック版の胎蔵曼荼羅図（MANDALA）の裏面に記されている各尊の名称を参照しました。〕

ところで、「黄道十二宮」は太陽の軌道に基づく星座名ですが、暦の吉凶きつこうを占う「二十八宿」は、月の軌道に基づく星座名です。古代の中国の神話では、天の四つの方位を「四象」と称し、それぞれの方位を司る靈獸りやうぶつがいました。東は青龍せいりゆう、西は白虎びやくこ、北は玄武げんぶ、南は朱雀すざくの四獸で、これを四神しじんと称します。東寺胎蔵曼荼羅図では、四象に対応するのは、以下の二十八宿しはちじゅうです。ただし、四象に対応する星宿せいしゅくの配置は、暦の吉日と凶日とが重なりますので、いろいろ変わります。以下の分類と順番は、東寺胎蔵曼荼羅図の場合です。この曼荼羅図では、東西南北のどの外金剛部院げこんじゅうにも、赤い宝珠ほうじゆを持つ星宿せいしゅくが七人ずつ居ます。

東方 せいりゆう の青龍 せいりゆう は、昴宿 ぼうしゅく	昴畢宿 ぼいつしゅく	參宿 しんしゅく	觜宿 ししゅく	鬼宿 きしゅく	柳宿 りゅうしゅく	井宿 せいしゅく
西方 びやくこ の白虎 びやくこ は、房宿 ぼうしゅく	尾宿 びしゅく	牛宿 ぎゅうしゅく	女宿 じょしゅく	心宿 しんしゅく	箕宿 きしゅく	斗宿 としゅく

北方げんぶの玄武いしゆくは、胃宿ろうしゆく 壁宿へきしゆく 奎宿けいしゆく 室宿しつしゆく 危宿きしゆく 虚宿きよしゆく。
 南方すざくの朱雀せいしゆくは、星宿ちようしゆく 張宿よくしゆく 軫宿しんしゆく 氏宿ていしゆく 亢宿かうしゆく 角宿かくしゆく。

(東寺の曼荼羅図の裏面では軫宿ではなく、軫星です。)

外金剛部院げこんごう(東)の中央の門もんの右みぎ(南)側から始めると、持国天じこくてんは、四天王してんのうの一尊で、東の方位を護ります。西の方位は広目天こうもくてん、北の方位は毘沙門天びしゃもんてん(多聞天の場合も)、南の方位を守るのは増長天ぞうちようてんです。

門もんの右側みぎ(南)に居る持国天じこくてんの右みぎ(南)には、大梵天だいぼんてん(星座のスバル座)がいて、左手に丸い曼陀羅華まんだらけを持っています。その向かつて右隣みぎとなり(南側)に居るのは昴宿ぼうしゆくとやや薄い昴畢宿ひつしゆく、その右は、参宿さんしゆく、觜宿ししゆく、鬼宿きしゆく、柳宿りゅうしゆく、井宿せいしゆくで、併せて七星宿です。これらは東方青竜七宿と称されます。七宿の右みぎ(南側)隣となりに、羊宮ようぐう(おひつじ座)と牛宮ごぐう(おうし座)とが、上下になつて動物の姿で居ます。その右みぎ(南側)には、上下になつて、二体の男女宮なんによぐうが居ます(ふたご座)。下の赤い宝珠ほうじゆを持っているのが女宮じよぐうでしょう。その右みぎ(南側)には、同じく上下になつて、やや小さい姿の流星りゅうせい(斜め姿で)と形都星けいとせい(彗星すいせい)とが居ます(『東寺の曼荼羅図』四六頁の図と四九頁と五三頁の解説)。その向かつて右みぎ(南側)に

は、三頭の馬に乗った日曜にちようと、右上に日曜眷属にちようけんぞく（日曜の従者）が居ます。その右（南側）に婆藪仙ばすせん（千手千眼観自在菩薩せんじゆせんげんかんじざいぼさつの眷属けんぞく）が居て、婆藪仙ばすせんに向かつて左下に、赤い布で膝をまとう妃きさの婆藪仙后ばすせんこうが居ます。婆藪仙后ばすせんこうの右に、小さい火炎光を帯びた火天妃かてんひと、最右（南）端には、大きい火炎光の背光に包まれ、右手に三角形の「遍知へんち？」を載せた皿を持つ火天かてん（火の神）が居ます。

外金剛部院げこんごう（東）の中央の門の左（北）側には、帝釈天たいしゃくてんが居て、右手に長い宝戟ほうげきを持っています。ちなみに、「十二天」とは、天空の十二方位を護る仏たちで、帝釈天たいしゃくてん（東）、火天かてん（南東）、閻魔天えんまてん（南）、羅刹天らせつてん（南西）、水天すいてん（西）、風天ふうてん（北西）、毘沙門天びしゃもんてん（北）、伊舎那天いしゃなてん（北東）、梵天ぼんでん（上空）、地天ちてん（下の大地）と、日天にってん（太陽）と月天がつてん（月）です。

帝釈天たいしゃくてんの左（北側）には、微闍耶びじゃや（日天の眷属けんぞく）がいて、その左に、何頭もの馬に引かれる車の乗った大きな姿の日天にってんが居て、左手に蓮華の花の茎を持っています（もとはヒンズー教の太陽神群から）。その左が太陽を表す日天にってんの妃ひめで、優しい顔の日天后にってんこうが居ます。これで日天にってんの三尊そそが揃います。その左（北側）には、小さな二階建ての楼閣が四つ並んでいます。

それらの楼閣の中には、向かつて左方向（北）へ、識無辺処天、空無辺処天、無所有処天、非想天（有頂天）の「四無色天」が瞑想しています。煩惱の程度に応じて欲界と色界と無色界の三界があり、非想天はその最上界にあたります。非想天の左側には、上に並ぶ三体と、その斜め下に並ぶ三体の六尊が来ます。楼閣の左に居るのが堅牢地神で、その斜め上が（堅牢）地神后です。その左（北側）には、上に器手天后と下に器手天がいて、その左に居るのは、上の喜面天と下の常醉天です。

最左（北）端に居る伊舎那天は、もとはヒンズー教のシヴァ神で、天空の魔王でしたが、仏教では、天空を護る十二天の一人です。右手で三鈷杵を載せた長い宝戟（槍）を持ち、左手は赤いものを入れた丸い皿を差し出しています。その下には小柄な伊舎那妃が居ます（この二人は、日本のいざなぎ、いざなみ二神の祖神とも言われます）。

【外金剛部院】（西）

最下部（西）の外金剛部院の中央には、東の外金剛部院の場合と同じように、緑の門の二柱があり、その真ん中に、三鈷杵を載せた花卉を入れた水瓶が置かれていて、水瓶の右（南側）には、難陀龍王と対面天が、水瓶の左（北側）には、跋難陀龍王と難

破天ばてんが水瓶を守護しています。〔以下の記述は「インターネットの Mandara Dualism」(二〇二四年一月一二日)の「外金剛院(西)」や東寺発行の胎蔵曼荼羅図(MANDALA)を参照しました。〕

門の左側(北)には、天の西を守護する広目天が、青味を帯びた姿で宝戟ほうげきを構えて座つていて、その左(北側)には水天が居て、その左に上下して、水天妃すいてんひと水天妃眷属すいてんひけんぞくとが居ます。その左には、インドの神鳥とされ、左右に翼を持つ迦楼羅かろうらに乗った青い護法善神ならえんてんの那羅延天ならえんてんが居ます。その左に那羅延后ならえんごうが居て、その左側に弁才天べんさいてんが琴ことを持っています。その左に、青い孔雀くじゃくに乗った六面の鳩摩羅天くまらてん(別名「韋駄天いだてん」)(無執着の童神)が描かれています。その左には、左手に花を持つ月天がつてんが、三羽の鷲鳥に乗っています。

月天がつてんの左(北側)には、上に三体とその下に二体の歌姫たちが居ます。右上から順に、月天女がつてんによと歌天女かてんによと樂天がくてん、その下には向かつて右から、太鼓こてんを持つ鼓天かてんと、歌天かてんと、少し離れて衣ひろがえを翻ひるがえす風天妃眷属ふうてんひが居ます。その左(北側)には、赤い袈裟けさで宝棒くわぼうを持つ風天妃ふうてんひが居ます。その左に上下になつて、二体の風天童子ふうてんどうじが居て、最北端に居るのが鎧よろいを着て襟卷ひるがえきを翻ひるがえす風天ふうてんで、右手に長い幢はたを持っています。

外金剛部院（西）の中央の門の右側（南）には、いかめしい顔の水天すいてんが居て、右手に利剣を左手に赤い宝珠ほうじゆを持っています。その右下にやや小さい姿の水天眷属すいてんけんぞくが長い宝戟ほうげきを持っています。この二体の右（南側）には、上段に四体と下段に二体が、水天すいてんと同じ赤い宝珠ほうじゆを手にして座つていて、これら六体は、星の二十八宿しゆくの星宿せいしゆくに属します。

上段の四体を左（北）から右（南）へたどると、房宿ぼうしゆくは、さそり座の一部で、月火水木金土日きん土日の七曜しちようの火曜くわによう（火星の影響を受ける）にあたります。その右の尾宿びしゆくは、さそり座に属し、七曜は「木」です。次の牛宿ぎゆうしゆくは、やぎ座に近く、稲見星いなみほしと称されます。四番目の女宿じよしゆくは、やぎ座に属し、七曜は「土」です。

下段を向かつて左（北側）から見て行くと、心宿しんしゆくは、さそり座に属し、七曜は「火」です。その向かつて右（南側）の箕宿きしゆくは、射手座いててに属し、七曜は「木」です。箕宿きしゆくの右（南）に居て、箕宿きしゆくのほうに顔を向けているのは、斗宿としゆくです。斗宿としゆくは、いて座とさそり座に係し、七曜では木星と土星の影響で「木」と「土」です。房宿ぼうしゆくから斗宿としゆくまでが、西方白虎七星せいふくしちせうです。斗宿としゆくの右（南側）に居る矢を持ったやや小柄な童子は、弓宮きゆうきゆうです。弓宮きゆうきゆうは射手座いててに属して、斗宿としゆくと箕宿きしゆくと尾宿びしゆくとが、これと関連します。弓宮きゆうきゆうの上には、蝎虫宮かつちゆうきゆう

(さそり座)を表す蠍が居ます。

蠍に向かつて右(南側)には、二人の老体が、右手を差し出す仕草で並んで立っています。秤宮と、その右(南側)が土曜(土星)です。秤宮と土曜の下に居るのは、白く輝く円光を頭に持つ月曜です。その右で、顔を見合わせている二体は、地球に最も近い惑星の水曜と摩拏赦(人間の男)です。この二体の上には、赤みを帯びた円光を持つ摩拏赦女(人間の女)が居て、この三体は、ちょうど三角形に配置されています。上の摩拏赦女の右には、死と病の魔神の遮文茶が居て、赤黒い猪の頭で、冠を頂き、右手に器盤を持ち、左手を拳にしています。

その右(南側)に居るのは、赤い衣を着て目立つ姿の帝釈女です(東の外金剛部院の北側の帝釈天と対応する?)。帝釈女の下に、鳩摩利と梵天女が左右に並んでいます。帝釈女に向かつて右隣に居るのは、緑の衣に赤い袈裟をまとう烏摩妃です。烏摩妃の右(南側)に居るのは、白牛に跨がり三つ又の宝戟を持つ大自在天です。これに向かつて右(南側)に、赤い宝珠のようなものを持つ羅刹女(上)と、羅刹(下)がいます。最南端には羅刹天が居ます。羅刹天は、目をむいた恐ろしい形相で左側を睨み、

赤い衣をまとい、右手に剣を持ち、左手で剣の印を作っています。羅刹らせつ天は、その剣で衆生じゆじやうの煩惱ぼんのうを断つと言われ、十二天の一人であり、西南の方位を守護します。もとは人を食らう鬼神でしたが、仏ほとけの説法に接し、法華經を信じて衆生しゆじやうを守る神になったと言われます。

五章 北と南の外金剛部院

【外金剛部院】（北）

最左端（北）と最右端（南）の外金剛部院げこんごうぶいんには、縦の院の中央に、緑の門柱二柱が縦に並んでいます。したがって、これらの院の諸尊は、上下に並ぶことになります。縦並びの諸尊は、東と西の外金剛部院げこんごうぶいんの門の場合と同じように、中央の門から二つ（上下）に分かれて、門から上と下の最端にいたる構成になります。したがって、ここでは、門の上部を下から上（東）へ、門の下部を上から下（西）へ見ていくことにします。この構成は、金剛手院かんのんと観音院かんのんにもあてはまりますから、これらの両院も、上下の真ん中から上と下へ向かう序列で見るのが適切であることを教えてくれます。（以下の記述は「インタ

ーネットの Mandara Dualism 」（二〇二四年一月二日）の「外金剛院（西）」や東寺発行の胎藏曼荼羅図（MANDALA）を参照しました。」

北と南の両外金剛部院の門柱は、曼荼羅図全体への出入り口だとあります（『東寺の曼荼羅図』五三頁）。北の外金剛部院の門頭には、頭に二本角の魔除けの鬼が齒をむき出しにしています。その下には、二本の柱の間に、頭上に七匹の蛇をつけ、右手に劍を持った難陀龍王（八大龍王の一人で雨乞いの龍神）が右（南側）に、その左（北）には、弟の烏波難陀龍王が、同じ七蛇を頭上につけて、顔を見合わせて並んでいます。「難陀」の原意は「歡喜と幸せ」を意味します。二人の下右側には、左手を膝に置き、右手を「く」の字にあげた俱肥羅天（財宝を護る神）が居て、その向かつて左（北側）に並んで、妃の俱肥羅天女が居ます（「俱肥羅」の原意は「富の神」）。以上が、門柱の中で門を護る四体です。

門柱の上（東）には、十二天の一人で天の北方を守る毘沙門天が居ます。毘沙門天は、天の四方を護る四天王としては、多聞天とも称され、宝珠を載せた長い宝棒を右手で握り、左手に舍利塔を載せています。毘沙門天の上（東）には、赤い炎光に包まれ

成就持明仙じょうじゆぢみょうせんが座まじなつています。「明呪みやうじゆ」は、密教の真言を唱える呪いまじなのことで、成就持明仙じょうじゆぢみょうせんは、この呪いの効力を發揮はつしやう（成就）させる仙人です。その左には、小柄な妃きさくの成就持明仙女じょうじゆぢみょうせんによが立たつています。

成就持明仙の上じょうじゆぢみょうせん（東）には、三体ずつ六体が、縦の二列になつて居ゐます。成就持明仙のすぐ上（東）の左（北）が危宿きしゆくで、向かつて右（南）が虚宿きよしゆく、その上は、左が奎宿けいしゆくで右が室宿しつしゆく、その上は、左が婁宿ろうしゆくで、右が壁宿へきしゆくで、合あわせて六尊です。これら左右の宿は顔を見合あわせていますが、六体の上（東）には胃宿いしゆくだけが居ゐます。これら七尊は、二十八宿の北方玄武七星ほつぽうげんぶしちせいで、赤い宝珠ほうじゆを手てにしています。

胃宿いしゆくの右上には少女宮しやうによぐうが居ゐます（十二宮のおとめ座）。その左（北）に居ゐるのは蟹かにの姿さの（巨）蟹宮かいぐうで（十二宮のかに座）、これら二つの上に、獅子ししの姿さの獅子宮ししぐうが居ゐます（十二宮の獅子座）。獅子ししの左上に居ゐるのは、赤い衣えをまとい、両手りやうてを宝棒ほうぼうの上に載のせて座まる戦鬼せんきで、これは戦争の鬼です。戦鬼せんきの右には、ふつくらと美しい顔かほの金曜きんぎやう（金星を表あらわす）が居ゐて、赤い袈裟けさを翻ひるがえしています。ちなみに、この組み合あわせは、ヨーロッパのアイコンで描えがかれる戦いくさの男神マルス（火星）と平和の女神ウエヌス（金星）を想起しきさせます。

二体の上には、右手に長い三つ又の宝戟ほうげきを持ち、顔が象を想わせる毘那夜迦びなやかが居ます。これの梵語名の原意は、「導き案内する者」「障害を取り除く者」で、ヒンズー教の神を受け継ぐその頭部は象の姿です。なお、中国の唐の歡喜天かんぎてんの眷属では、象の頭の人身が、二体の男女になつて抱擁し合う姿もあります。毘那夜迦びなやかの上は、北金剛部院こんごうぶいんの最東端にあたり、そこに居るのは、青黒く、いかめしい三面六臂まつかうりくの摩訶迦羅まかからです。もとのヒンズー教では破壊の神で、いわゆる大黒天の元祖にあたりますが、仏教では、戦と財福と冥界みょうかいを表し、両手で剣を握つて馬に乗り、背後には象の皮を手で広げています。その上は、東の外金剛部院げこんごうぶいんの最北端にもなり、青い伊舎那天いしゃなてんと、その下に小柄な伊舎那天いしゃなてん妃ひが居ます。

北の外金剛部院げこんごうぶいんの中央の門の下（西側）に居るのは、左手で金剛拳こんごうけんをつくり、右手で金剛杵こんごうしよを握る帝釈天たいしやくてんです。どういふわけか、帝釈天たいしやくてんは二人居て（『岩波仏教辞典』八七八頁）、東の門の北側（左）の帝釈天たいしやくてんは、灰色姿で、いかめしい顔で右を向いています。が、北門の下（西側）のほうは、女性を想わせる白い顔で正面を向いています。帝釈天たいしやくてんの右下に小さく描かれているのは帝釈后たいしやくこうで、この二人の下（西）で躍っているのは樂天がくてんで

す。樂天がくてんの足下の左右には、二人の歌天かてんが居て、これらの女天は、両手を叩いて？聖なる歌を讚美しているように見えます。その下の左右に、帝釈天たいしゃくてんの眷属けんぞくである緊那羅きんならと緊那羅女きんならによが居ます。この二人は音楽の神で、手に何かを持っているようです。

二人の下（西）には、赤い袈裟けさを翻えひらがえして座っている摩睺羅迦まごらがが居ます。ほんらい、首は大蛇で体は人間のインドの鬼神だと言われますが、ここでは、ふつくらした優しい顔を見せる帝釈天たいしゃくてんの眷属けんぞくで、緊那羅きんならとともに音楽の神です。摩睺羅迦まごらがの左右に居るのは、摩睺羅迦女まごらがによたちで、二人とも摩睺羅迦まごらがの妃きです。摩睺羅迦まごらがを中にして並ぶ三体の下には、同様に三体ほどけずつ並ぶ仏たちが六段続き、摩睺羅迦まごらがから始めて、八段目に、風天ふうてんと、その童子の二体が来ます。

摩睺羅迦まごらがの下に居るのは、成就持明仙じょうじゆぢみょうせんの三人組です。成就持明仙じょうじゆぢみょうせん（呪いを成就させる仙人）は、左手に何か持っていて、左右に妃きの成就持明仙女じょうじゆぢみょうせんによが居ます。その下の自鬘じまん天てんと二人の自鬘天女じまんてんによは、次に来る他化自在天たげじざいてんの眷属けんぞくです。その下に来るのは他化自在天たげじざいてんで、その名前は、他者の快樂をほしいままに自分のものにすることで変化へんげするものを意味します。もとは、覚さとりの道を妨げる魔神でしたが、ここでは、逆に覚さとりの道を樂

しませる仏ほとけです。左手に弓、右手に矢を持つのは、快樂の獲物を自由に仕留しとめるためです。左右には、他化自在天たげじざいてん女が居ます。その下に、白い衣で正面を向いているのは兜卒とそつ天てんで、五感の欲望を満たす喜びを表しています。兜卒天には、内院と外院がいんとがあつて、内院は弥勒菩薩みろくぼさつの浄土で、外院は、天の衆生しゅじやうが楽しむ場所です。左右に居る兜卒天女にょは、左（北側）が白い衣で右（南側）が赤い衣で、右の赤いほうが弥勒菩薩みろくぼさつでしょう。

その下には、大高音天だいこうおんてんと二人の高音天女こうおんてんにょが居ます。仏教の三界さんがいとは、外側から、色界と欲界と無色界とが、ちようと胎藏曼荼羅たいざうまんだらのように構成されていて、その中心に、大日如来だい にち によらいの仏性ぶつしやうが存在します。「光音こうおん」とは、「音声おんじやう」を発することのない（大日如来だい にち によらいの言葉ことばの）光明こうみやうが、そこから「鳴り響く」ことを意味します。如来は、音声おんじやうがなく、語るときには口から浄きよらかな光を発して語るとされるからです。その下には、緑の袈裟けさをまとい、右手に蓮華の花の茎を持つ光音天こうおんてんと二人の光音天女こうおんてんにょが居ます。光音天の三体組の下に居るのは、二人の風天童子ふうてんどうじと、その下で袈裟けさを翻ひらがえし右手に長い幢はたを持つ風天ふうてんです（西の外金剛部院けこんごうぶいんの最北端）。

【外金剛部院けこんごうぶいん】（南）

中央の門の上に居る鬼の面は、南北同じですが、北の門上の鬼の頭には火炎を帯びた緑の宝珠ほうじゆがあり、二柱の門上には、大きな薬壺やっこのようなものが載つていて、南のほうでは、鬼の頭上と二柱の門上には、火炎を帯びた黒い宝珠ほうじゆがあります。(以下の記述は「インターネットの Mandara Dualism」(二〇二四年一月一二日)の「外金剛院げこんどう(南)」やその他を参照しました。)

南の外金剛部院げこんどうぶいんの中央にある二柱の門の中に居るのは、北の場合と同じで、上の向かつて左(北側)に難陀龍王なんだりゅうおうと、その右(南)側に烏波難陀龍王うはなんだりゅうおうが居ます。難陀龍王なんだりゅうおうは、北と南と西の三つの外金剛部院げこんどうぶいんの中央にある二柱の門の中に居ます(東寺MANDALAの裏面を参照)。北の難陀龍王なんだりゅうおうは、頭髮に何匹もの蛇を持ち、右手で劍を握り、左手は金剛拳こんごうけんを膝の上に載せています。南の難陀龍王なんだりゅうおうの頭髮も蛇ですが、左手を膝の上に置き、右手で何かを握っています。北の烏波難陀龍王うはなんだりゅうおうは、相手の難陀龍王なんだりゅうおうと同じに蛇の頭髮で、南の烏波難陀龍王うはなんだりゅうおうも、その相手と同じ蛇の頭髮で、その姿も、相手の難陀龍王なんだりゅうおうと同じ様です。南では、二人の下に居て門を護る左右の二人は阿修羅あしゅらです(もとは呪術に優れたヒンズーの神アスラ)。二人とも北の二人と同じに、右

手で剣を握つて、左手のほうは膝の上に置いていますが、着ている衣の色が異なつて、北の左側が赤いのに対して、南では、右側が赤い衣です。

門の上部を下(西)から上(東)へ見ていくと、南の門の上(東)にいるのは増長天ぞうちやうてんです。梵語ぼんごの名前の原義は「芽を出しはじめた穀物」「増長」の意味で、天の南方を護る四天王の一人です。両手を膝の上に置き、目をむいて正面を見据えています。その向かつて右には、緑色の小柄な増長天ぞうちやうてんの従者が座つています。

増長天の上(東)には、美しい顔の藥叉持明やくしやじみょうを真ん中に、左右に藥叉持明女やくしやじみょうによが居ます。藥叉持明やくしやじみょうは、もとはヒンズーの鬼神ですが、仏教では、財宝の恵みをもたらします。左右の二人は、呪まじないに優れた(明呪みょうじゆ)侍女で、左(北)の侍女は座り、右(南)の侍女は立つて槍を持っています。

その上の左(北)と右(南)の二人は、角宿かくしゆくと氏宿ししゆく、その上は、張宿ちやうかくと翼宿よくしゆくで、どれも南の方位(朱雀)を護る宿しゆくです。その上には、軫宿しんしゆくを真ん中にして、その左(北)と右(南)に星宿(土地宿の異名)と亢宿かうしゆくとが居ます。どれも、二十八宿にじはちしゆくの南方朱雀七星すざくしちせいに属します。角宿かくしゆくから亢宿かうしゆくまでの七人は、赤い宝珠ほうじゆを手に使っています。その上の左右の二人

は、木曜（木星を司どる）と火曜（火星を司どる）です。どちらも九曜に入ります。

木曜と火曜の間に居て、南側の火曜のすぐ左（北）に、大きな顔だけを見せている女性らしいのが羅睺星です。もとのヒンズー教で、これは凶星でした。火水木金土の五つの惑星に、日と月とを加えると七惑星で、これに羅睺星と計都星（この二つは実在しない仮想の惑星）を加えると、吉凶を占う「九曜」になり、羅睺星は九曜の一つで、日蝕と月蝕を起こす凶星です。

向かつて左側の木曜と右側の羅睺星のすぐ上には、左向きの魚が居て、その魚の左上には、もう一匹の魚が右を向いています。これら二匹の魚が双魚宮（うお座）です。この二匹に向かつて右には、齒をむいて口を開け、赤い尾ひれを持つ大きな怪魚の摩竭宮が居ます。摩竭宮は黄道十二宮の山羊座にあたります。その上には、蓮華の花弁を入れた大きな壺の形をした賢瓶宮（みずがめ座）が来ます。賢瓶宮の上に来るのが、自在天女で、その左右に、毘紐女と夜摩女が居ます。この二人は閻魔天の眷属で、七母女天に含まれます。

毘紐女と夜摩女の上には、髭を生やし瘦せた姿（修業僧）の瞿曇仙と、槍のような

宝戟ほうげきを持つ若い瞿曇后くどんこうが居ます。「瞿曇くどん」は、釈迦しやかの姓の「ゴータマ」から出た仙人の名前です。その上には、火天かてんの眷属けんぞくである阿詣羅仙あけいらせん（瞿曇くどんと同じような姿）と、宝棒ほうぼうを持つ若い阿詣羅仙后あけいらせんこうが来ます。その上に、煩惱ぼんのうを焼き尽くす火炎かえんを帯びて、火天かてんが居ます（北外金剛部院けこんごうぶいんの最南端）。

南の外金剛部院げこんごうぶいんの中央の門の下（西）には、閻魔天王えんまてんのうを中心に、左右に、黒闇天女こくあんてんによと太山府君たいせんふくんが居ます。閻魔天えんまてんは、もとはインドの神で、仏教では運命や死と冥界の神です（閻魔天えんまてんは焰摩天えんまてんとも記されます。密教では焰摩天えんまてんを用いる場合が多いようです）。密教で焰摩天えんまてんは、八方位（東西南北と東北・東南・西北・西南）を守護する八方天はつぱうてんの一人です。帝釈天たいしやくてん（東）、火天かてん（東南）、焰摩天えんまてん（南）、羅刹天らせつてん（西南）、水天すいてん（西）、風天ふうてん（西北）、毘沙門天びしゃもんてん（北）、伊舍那天いしゃなてん（東北）で、焰摩天えんまてんは南方を護ります。焰摩天えんまてんに属する眷属けんぞくに焰摩七母天えんましちもてんがいます。門の上（東）側に描かれて、先に見た自己じ在天女ざいてんによも、毘紐女びちゆうによと夜摩女やまによも焰摩七母天えんましちもてんに入ります。

南側の外金剛部院げこんごうぶいんの中央門のすぐ下（西）に居るのは焰摩天えんまてんで、ふつくらした優しい顔をやや下に傾けて水牛の上に座り、左手に、人の顔を載せた幢はたを持ち、右手は恐れ

を取り除く施無畏印です。焰摩天が顔を向けているのは、その左（北側）下に居る小柄な黒闇天女です。梵語の名前の原義は「人が死ぬ夜」で、三人居る焰摩天の妃の一人です。

焰摩天の下（西）には、太山府君が居ます。焰摩天の眷属で、名前の由来は、「人間の行為を記録する者」です。太山府君も、輪の中に人の顔を載せた幢を持ち、その左下に居て、茶色の長い髪のを束をなびかせて合掌している小柄な人物に語りかけています。その名は「死鬼衆」で、死後に地獄で閻魔の裁きを受ける死人たちの一人です。

ところで、太山府君の左下（死鬼衆の真下）に居て、左手に花を持ち、右手に大きな壺を持つ白い女性らしい人物は、筆写（私市）の見るところ、太山府君の妃ではないかと思われます。この妃の前には、二人の鬼衆女が居て、恐ろしい顔つきで、（人の）血で満たされた大きな皿、「劫波杯」を手にしています（『東寺の曼荼羅図』五三頁の図一二を参照）。これら三人の下には、同じような小柄で茶色の鬼衆たちが六人続きます。六人の鬼衆たちの下に居る三体の白い人物たちは茶吉尼衆で、三体の下には、人の死体らしい茶色の姿が横たわっています。茶吉尼衆は、人間の肉を食べる鬼女でヒンズ

一の女神ダキーニに由来する荼吉尼天の配下ですが、胎蔵曼荼羅では焰摩天の眷属になります。三体の下に二人ずつ並ぶ四人は、呪いの功德に優れた成就持明仙衆ですが、ここでは焰摩天の眷属とされています。

その下には、右手に利権を持つ摩尼阿修羅を中心に、その両側には摩尼阿修羅の妃たち、三日月型の刃を持つ宝棒を手にする摩尼阿修羅女たちが来ます。摩尼阿修羅たちの三体は、下の阿修羅に似た姿をしていて、阿修羅衆に入ります。

摩尼阿修羅の下には、阿修羅が居て、その両側に居るのは、阿修羅の妃の（眷属にも見えますが）阿修羅女たちです。阿修羅は、ヒンズー教では天帝の魔性のアスラ神のことです。仏教では、護法のために闘う神ですから、鎧を着て、赤い顔をして横目で睨みを効かせ、右手には太い宝棒を握り、左手は、膝の上で金剛拳を握っています。左（北）側にいるのはその妃で、赤い衣をまとい、額に花卉を頂く阿修羅女です。阿修羅の従者と思われる右（南）側の眷属は、先が二股で法輪を付けた宝戟を持っています。古代インドの神々（邪神や魔神）は、仏教に帰依することで、いわゆる八部衆と称される部族を形成します。天衆、龍衆、夜叉衆、乾闥婆衆、迦楼羅衆、阿修羅衆、緊那羅衆、

摩睺羅迦衆の八部衆で、阿修羅は、この八部衆の一つを形成します。

阿修羅たちの下には、左と右に、赤いスカートの若い迦楼羅女と、やや茶色がかつた迦楼羅王とが居ます。迦楼羅は、風雨の災害をもたらす毒蛇を食べて人を護る靈鳥から由来するので、衆生の煩惱の三毒を食らうとされ、この二人は、口から金箔のような息を吐き、翼を付けて描かれています。

このふたりの下（西）には、左に鳩槃茶と、右に鳩槃茶女が居ます。鳩槃茶は、巨大な陰囊を持ち、大きい赤い太鼓のような陰囊を叩いているようです。顔はよく見えませんが、鳩槃茶女が馬の顔のように描かれているので、鳩槃茶も同じ顔でしょう。

次に来るのは、最下（西）端の羅刹天に最も近い羅刹童子と羅刹童女です。羅刹童子は、右手に宝珠を載せた宝棒を持ち、左手で金剛拳をつくっています。羅刹童女のほうも太い宝棒らしいものを右手に持ち、左手をやや曲げるように上げています。經典によれば、釈迦が雪山で覺りを得ようと修行していると、帝釈天が、亡者を責める地獄の鬼の姿をした羅刹に化身して現れ、「諸行無常・是生滅法」（諸行は無常にして、是れ生滅の法たり）」と説くと、これを聞いた釈尊が、その偈（韻文の言葉）の残りの半

分を知りたいと願つて、そのために己の身を羅刹に食べさせると約束します。すると、羅刹から「生滅滅已・寂滅為楽」（生滅の滅し已われれば、寂滅を樂と為す）と教えられます。釈迦は、その偈を書き留めて、木に登り身を投げると、羅刹は帝釈天の姿に戻り釈迦を褒めて、必ず成仏が成就すると約束したと伝えられます。ちなみに、この、「諸行無常・是生滅法・生滅滅已・寂滅為楽」は、空海が教えた「いろは歌」のもとであると言われます（インターネット『聖教新聞』用語解説より）。

あとがき

筆者（私市元宏）は、長年キリスト教を中心に、宗教人類学に興味を抱いてきました。仏教が伝える靈性を知りたいと想い、曼荼羅図を見ようと東寺を訪れました。東寺の講堂で二十一体の立像の仏たちに接し、続いて金堂で、薬師如来と、日光と月光の両菩薩の立像などを観てから、食堂に入ると、入り口の近くで、立派な方形の金剛と胎蔵の両界曼荼羅図に出合うことができました。美しい胎蔵曼荼羅図を感慨深く眺めているうちに、「ここに描かれているのは、どんな仏さんたちだろう？」という素朴な

疑問が湧いてきて、売店を訪れ『東寺の曼荼羅図』と『東寺の仏たち』と、『国宝両界曼荼羅図・金剛界・胎藏界』の二枚の曼荼羅図などを求めて調べました。

絵画の展示会では、その絵の画家とそこに展示されている作品について簡単に分かりやすい解説がついています。そのおかげで、全く知らない画家の描く作品でも、それなりに理解し鑑賞することができます。ところが、この曼荼羅図については、どういうわけか、立派な画集や、専門的な解説などが多い割には、初心者でも分かる「展示会用」の解説がなかなか見あたらないのです。そこで、先ず胎藏曼荼羅図を自分なりに「勉強して」、初めてこれを見る人のために書いたのがこの小冊子です。

胎藏曼荼羅図の仏さんたちの名前を調べるうちに、仏教が描き出す世界像の全体が、仏さんたちの映像を通じて伝わってくるのを体観しました。「大日如来が発する智慧の光明とは、こういうものか」と、仏さんたちの姿から伝わってくるのです。これは驚くべき図像（イコノロジー）です。不思議なご縁を覚えます。東寺を訪れて感じたのは、大勢の観光客が来ているのに、曼荼羅図を見ようとする人がそれほど多くないことです。英米やドイツやフランスの人たち、アジアの国々から見学に来た若い人たちが、せ

つかく訪れながら、曼荼羅図を見ようとしなのは、もったいないです。インターネットで、東寺の両界曼荼羅図を見ることができます。できれば東寺の食堂じきどうを訪れて、この冊子を片手に、胎蔵曼荼羅図を眺めることをお勧めします。

令和七年（二〇二五年）一月

京都の嵯峨野にて
私市きさいち元宏もとひろ

著者紹介

私市 元宏 (きさいち もとひろ)

1932年、北海道の生まれ。京都大学文学部卒。

公立高等学校、工業専門学校、京都産業大学、立命館大学、甲南女子大学の教員を歴任。

甲南女子大学名誉教授。その間、無教会キリスト教で、仏教に造詣の深い小池辰雄氏に師事。

ホームページ: <http://koinonia-jesus.sakura.ne.jp>

初めて見る東寺胎蔵曼荼羅図の仏たち

2025年 月 日 第1刷発行

著者: 私市 元宏

発行者:

発行所:

著者紹介

私市 元宏 (きさいち もとひろ)

発行所:

組版・印刷:

万一、落丁、乱丁の場合は送料当方負担でお取り替えいたします。上記住所までお送りください。

Motohiro Kisaichi

ISBN

Printed in Japan